

六字真言のチベット文字表記——Om maṇi padme hūṃ

中村雅之

1. 敦煌六字真言

「六字真言」とはチベット仏教で最もよく唱えられる6音節の真言(呪文)で、敦煌莫高窟に刻まれた6種文字によるものが有名である。以下は古代文字資料館所蔵の拓本。最上段の「莫高窟」という漢字の下に左からの横書きによるランツァ文字で「Om maṇi padme hūṃ」とあり、その下にチベット文字、中央の観音図を挟んで左側にウイグル文字(左端)とパспа文字、右側に西夏文字と漢字が記されている。いずれの文字も「Om maṇi padme hūṃ」の近似音を表現したものである。この真言は「ああ蓮華の上の宝珠」(中村元『佛教語大辞典』)と理解され得るが、他にも多くの解釈がある。ここでは哲学的な議論には一切関わらず、チベット文字の表記に関する点のみを取り上げる。



2. 「padme」の表記

「Om maṇi padme hūṃ」の「maṇi」は「宝珠」、「padme」は「padma（紅蓮華）」の処格とされるが異説もある。「Om」と「hūṃ」は感嘆詞のようなものであるが、哲学的に種々の解釈が生まれている。

その中の「padme」の部分でランツァ文字では「pa-dme」のように表記する。ランツァ文字よりは多少馴染みの深いデーヴァ・ナーガリー文字で再現すると、「पद्मे」となる。つまり、「p(a)」の次に、「dme（基字「m」＋上接字「d」＋母音記号「e」）」という構造になっている¹。ランツァ文字でもデーヴァ・ナーガリー文字でも子音連続は「上接字＋基字」で表記されるのが一般的である。

一方、チベット文字では「padme」の部分は「pad+me」という構造になっている。「pad」は基字「p」の右に後置字「d」を配して表されている。この配置は、理屈から言えば、基字「d」の左に前置字「p」を配したものとみて「pda」と解釈することも可能だが、実際のチベット語正書法では前置字として用いる文字は限られており、「p」はそのリストにないから、「p+d」は自然に「pad」と解釈される。なお、現代チベット語（ラサ方言）では「ad」は /e:/と発音されるから²、「padme」は /pe:me/ のように読まれることになる。

3. 「padme」のもう一つの表記

「Om maṇi padme hūṃ」という真言は広く流布しているため、チベット物産店のお土産の中にもしばしば記される。次のものは10年ほど前に友人からパリ土産として(?)頂いたものである。



画像右は「ブッダアイ」と称されるモチーフでチベット物産品としては一般的なものの。画

¹ ランツァ文字の場合は基字「m(a)」と上接字「d」の区分が明瞭だが、デーヴァ・ナーガリー文字では「dm(a)」が結合文字となっている。それでも「ma」の上に「d」がかぶさる構造であることは見て取れる。

² 星実千代 (1991) 『エクスプレス チベット語』白水社、39 頁参照。

像左は問題の「Om maṇi padme hūṃ」のチベット文字表記である。ここで面白いのは「padme」が「pa-dme」と記されていることで、「dme」は「上接字 d+基字 m+母音記号 e」から構成されている。しかし、チベット語正書法では上接字は「r」「l」「s」に限られており、「d」はリストにない³。したがって、ここで上接字「d」を用いて「dme」と表記しているのは、チベット語ではなく、あくまでも梵語の「Om maṇi padme hūṃ」の（ランツァ文字からの）翻字としての表記ということになる。真言は呪文であるから、どの文字で記されようとも梵語の音を表記することに意味がある。その際、元の文字（ランツァ文字など）の綴りをなぞる場合と、チベット語として自然な綴りを用いる場合とで揺れがあり、現在作られている種々のお土産品に記された六字真言の綴りにも両様が見られる。思うに、敦煌碑文に見られるような「pad-me」というチベット語として自然な綴りが本来のもので、商用の土産物などが多量に生産される際に、一種の権威付けのために梵語風の綴りを用いるものが現れたということではあるまいか。

³ 寺本婉雅（1922）『西藏語文法』内外出版、10頁参照。